

雨引山樂法寺所蔵《不動明王二童子像》について

水野 裕史

はじめに

本稿は雨引山樂法寺所蔵《不動明王二童子像》(種図1、以下樂法寺本と略記)についての調査報告書である。本稿では、樂法寺本の画面の状況について、図版を中心に言及していく。また様式や制作時期に関しても若干の考察を試みる。

一 調査資料の現状

作品名 《不動明王二童子像》

作者 不明

制作年代 不明

所有者 宗教法人 雨引山樂法寺(通称 雨引観音)

材質形状 絹本着色

数量 一幅

法量 縦一五七・六 横五一cm(表具含む)

縦八九・五 横三六・四cm(本絹のみ)

題箋 興教大師御筆 不動明王像

本図は絹継がない一枚絹によって描かれ、全体的に損傷が激しく、剥落や褪色、虫喰い、巻皺が多く見られる(種図2)。特に画面下部は褪色、巻皺による剥落が多く、図様の細部まで確認することは困難である。

全体の構成は図に見られるように、画面中央には五大明王の一つである不動明王が描かれている。画面向かって右下には不動明王を恭敬する小心者である矜羯羅童子、向かって左下には性悪者であり剽軽なおどけ者である制陀迦童子が描かれている(1)。また不動明王の真下には岩座の下から流れ出る滝が描かれているが、褪色によって細部は確認できない。

大まかにはこのような構成を取るが、中央の不動明王から状態を記録すると、髪を巻毛とし、頭頂に六花を戴き、左耳前に弁髪を垂らし、両目とも開く。頭髪や眉には金泥は用いられたようだが、褪色している。左の上牙で下唇を噛んでいるが、右牙の状況は剥落のため不明である。肉身は斜め右を向いて直立し、右肘を横に張って利剣を持ち、左手に羂索を下げ、腹の前に突き出している。右腕の右側に小さく一ヶ所、右足の右側に大きく一ヶ所の剥落が見られる。その輪郭は鉄線描と覚しき、太さの均一な線で描かれている。首飾りは剥落及び褪色により細部は不明である。また腕剣、臂剣や足剣等の装身具には金泥が用いられたようだが、褪色している。右足の足剣には胡粉が浮き上がっている。条帛は褐色地に胡粉で衣紋にそって隈取りされ、裳には褐色地に金泥唐草文を描く。衣紋線は肥

瘦のある線によつて描かれている。火炎光背は胡粉で描かれた炎を下地に朱色の炎が描かれている。その先端は不動明王の頭上で渦巻いている。明王の下には辛うじて岩座や滝、波文様が確認できるが、褪色及び巻皺による剥落が激しく正確な形までは判別できない。

向かつて左下の制吒迦童子の肉身は朱色で、右手に金剛棒を持ち岩に立てている。この金剛棒には金泥が用いられている。左手は、手首の部分が剥落していて肩衣を捻ずるのか、他に何か持物があるのか不明である。条帛には褐色地に不動明王と同じ金泥唐草文様が描かれている。裳には胡粉で描かれた下地に、褪色により細部まで確認することはできないが、何らかの文様が見られる。

向かつて右下の矜羯羅童子の肉身は白色で、両手で蓮華を持ち、不動明王側を向き、仰いでいる。蓮華は胡粉によつて描かれている。口唇は胡粉で描かれた下地に朱色で塗りされている。裳には朱色地に不動明王と同じ金泥唐草文様が描かれている。

画面左側には縦一直線に断続的かつ規則的に並ぶ三ヶ所の虫喰いの跡がある。また一番上の虫喰いの跡の周りにはしきも確認できる。画面上部には巻皺による剥落や褪色が確認でき、さらに広範囲に渡つて微が発生している。裏を見ると多くの鏝(かすがい)が存在する(補図5)。微は鏝に沿つて広範囲に発生している。これは修復時、鏝を施す際に用いた糊が表面に浮き出て広がったため、広範囲に微が発生したと推測される。また鏝の存在により修復が行われたことが明らかであるが、修復が行われたにも関わらず、画面及び表具の状態は良好とは言えない。

画面全体は黒色を帯びている。これは裏彩色によるものと考えられる。また所々画網が透けて、肌裏が見えているところがある。これは修復時、画網と肌裏を剥がす際に裏彩色が肌裏に付着したため、画網が透けたと言えるのではないであろうか。またこの肌裏が見えているところは、黒色で補彩の形跡が認められる。

表装について見ると、「天地」や「柱」、「中廻し」はすべて素材も色も同じ同一の裂地が使われている。また一文字には唐草文様のある裂地が使われている。

次に表具の状態について見るといくつかの損傷が散見される。「天」の向かつて左側には虫喰いが確認できる。同じく中程は剥落している。向かつて右の「柱」には巻皺やそれによる亀裂が確認できる。「風帯」は二枚の紙を張り合わせてあったようであるが、現在は剥離している。

「軸木」は、木製であり、「軸頭」には金の細工が施されている。「軸木」の中心部には三、四センチ四方の紙が貼られている。この下には同寸に切り込まれた木片があり、さらにこの下には小さな金属片が埋め込まれている。これは「軸木」が軽いため、重りとして入れられたものと推測される。

一一 様式と制作時期

楽法寺本の正確な構成は、損傷により判別できないが、本図に似た構成を持ち同一の粉本の存在が想定できる作例として静嘉堂文庫所蔵の《不動明王二童子像》(補図4、以下静嘉堂本と略記)を挙げたい。静嘉堂本の不動明王は、髪を巻毛、左耳前に弁髪、両目開眼、右肘を横に突き出し、腹を前に突き出すようにしている。また火炎光背は明王の頭上で渦巻いている。これらは楽法寺本と一致する。静嘉堂本について中野玄三氏は、「その大きな頭部、傲然たる態度はまさに醍醐寺本不動図巻中の円心様とよく似ているが、左手を下げて索を持つ姿は同不動図巻頭を欠乏した図と一致している。おそらくこれも円心様と考えてもよいから、静嘉堂本の不動は円心様と称することができるであろう」としている(2)。

円心様とは、承保・承暦年間(一〇七四〜一〇八一)に活躍した画僧円心が説いた仏画の様式である(3)。円心様の代表的な作例として先述の醍醐寺所蔵の《不動明王二童子像》(補図5)や同寺所蔵《不動図巻》(補図6、7)が挙げられる。

前者の《不動明王二童子像》の上部には「円心真筆也」との記述がある。また後者の《不動図巻》は不動明王の画像を集めた一巻であり、中には延円、良秀、玄朝、定智、弘法大師の筆と註された画像とともに円心筆と註された画像がある。

中野玄三氏は円心様の特徴について(前略)髪が巻毛で立像である以外は、多様な形式をとるものと考えられる」と述べている(4)。

樂法寺本の不動明王は、髪を巻毛とし、頭頂に六花を戴き、両目とも開いている。左の上牙で下唇を噛んでいるが、右牙は不明である。肉身は斜め右を向いて直立し、右肘を横に張って利剣を持ち、左手に絹索を下げ、腹を前に突き出してゐる。中野氏が述べる円心様の特徴と樂法寺本は、同じ特徴を持つ。これらから樂法寺本も円心様の系統に属するものと見なすことができるのではないであろうか。

室町時代における不動明王像の輪郭線や衣紋線は、強い肥瘦のある線によって描かれていることが多い(5)。しかし、樂法寺本の輪郭線は鉄線描で描かれ、また衣紋線は室町時代の作例よりも弱い肥瘦のある線によって描かれている。これは樂法寺本の制作時期が室町時代より上ることを示していると言えるのではないであろうか。

樂法寺本の不動明王の頭髮や眉、装身具は金泥を用いられている。松下隆章氏は頭髮や眉、装身具に金泥を用いるのは鎌倉時代中期以降のものとしている(6)。松下氏の見解に従えば、樂法寺本の制作時期は鎌倉時代中期より下るものと考えても良いだろう。

以上、樂法寺本には室町時代以前の表現様式が見て取れ、また絹目は非常に粗く、一般的に「足利絹」と呼ばれている鎌倉時代末期から室町時代にかけて多く使われていた画絹が使用されていることから、樂法寺の制作時期は鎌倉時代末期から南北朝時代のものだと推測することができるのではないであろうか。

おわりに

本稿では、樂法寺本の現状を中心に様式と制作時期について考察した。今後は先行図例を中心に他の寺院との関連性も含めて検証する必要がある。特に樂法寺

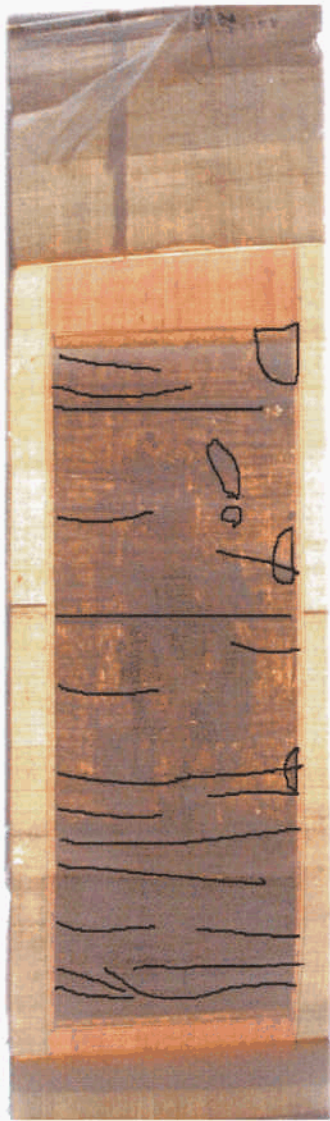
には、天正年間(一五七三〜一五九一)に醍醐寺の塔頭である光台院の斉淳より附法を受けた第七世宥仁がおり、これ以後醍醐寺の末寺となった時期がある(7)。醍醐寺には不動明王の画像が多数所蔵されており(8)、樂法寺本とは何らかの關係があると考えられる。これは今後の課題としたい。

註

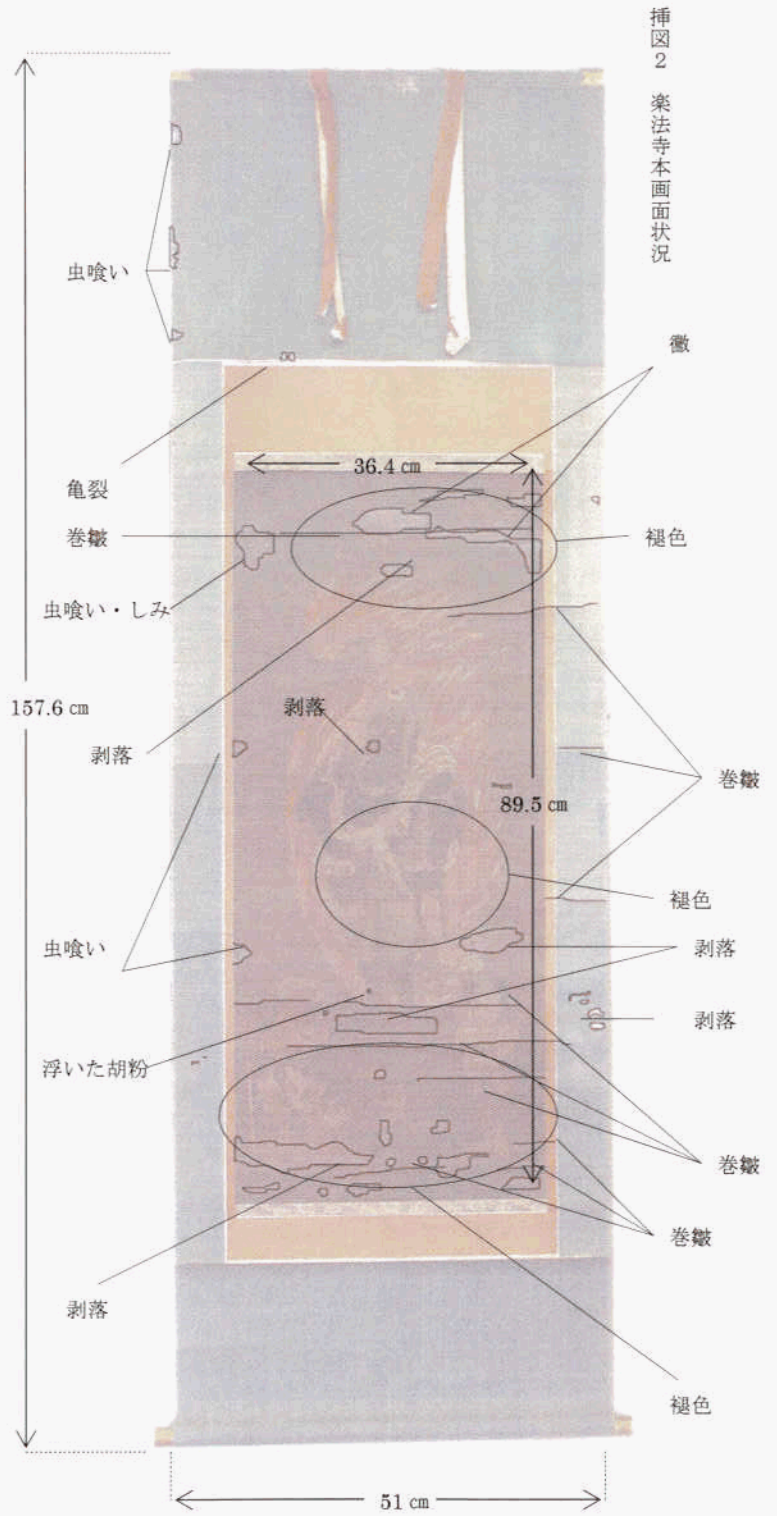
- (1) 制略童子の「略」の字は、通例では本字を使うが、本稿では略字とした。
- (2) 中野玄三「青不動以後における不動明王像の展開」『図像 不動明王』京都国立博物館 一九八一、二三四頁
- (3) 田中一松「画僧円心に就いての一疑問」『日本美術協会報告 三三』日本美術協会、一九三四
- (4) 前掲二、二二七頁
- (5) 室町時代の作例としては太山寺所蔵の《不動明王二童子像》や相應院所蔵の《不動明王二童子像》などが挙げられる。
- (6) 松下隆章「法光院不動明王二童子像に就いて」『美術研究 一五三』東京国立文化財研究所(美術研究所)、一九四九、二八頁
- (7) 飯島光弘編『大和村史』(大和村役場、一九七四、七二三頁)
- (8) 展覧会目録『国宝 醍醐寺展』(東京国立博物館、二〇〇一)



挿図1 《不動明王二童子像》 雨引山楽法寺所蔵



挿図3 楽法寺本・裏図



挿図2 楽法寺本画面状況

挿図4 《不動明王二童子》 静嘉堂文庫所蔵



挿図5 《不動明王二童子像》 醍醐寺所蔵



挿図6 《不動図巻のうち不動明王像》 醍醐寺所蔵



挿図7 《不動図巻のうち不動明王像》 醍醐寺所蔵

